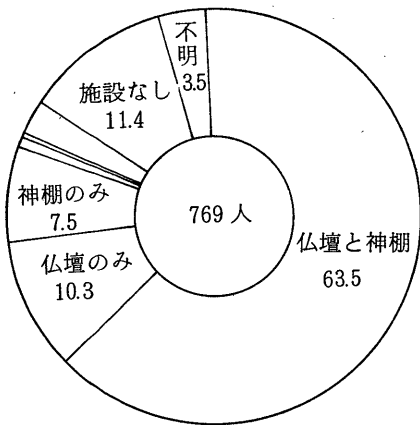


Ⅵ．宗 教 行 動

1. 宗教（信仰）のための施設（図Ⅵ-1）

仏壇と神棚の両方を所有する者が、全体の63.5%を占め、以下、仏壇のみ、神棚のみと続く。仏壇・神棚両方の所有者と仏壇のみを所有する者を合計すると、567人に達し、全体の73.8%を占める。また、仏壇・神棚所有者と神棚のみを合計した、神棚所有者は546人となり、全体の71%が神棚を所有しており、かなりの割合を占める。このような施設を全く所有しない者は、88人であり、全体の11.4%になる。

図Ⅵ-1 宗教施設



| 合 計 | 769 人 |
|-------|---------------|
| 仏壇と神棚 | 488 (63.5 %) |
| 仏壇のみ | 79 (10.3 %) |
| 神棚のみ | 58 (7.5 %) |
| 神棚と位牌 | 6 (0.8 %) |
| 位牌のみ | 2 (0.3 %) |
| それ以外 | 21 (2.7 %) |
| 施設なし | 88 (11.4 %) |
| 不 明 | 27 (3.5 %) |

〔年齢階級〕

仏壇と神棚があると回答した者は、20歳代と30歳代は40%代であるが、加齢と共に割合が高くなり、60歳代と70歳代は70%代、80歳以上になると88.9%に達する。反対に、何も持たない

という者は、20歳代と30歳代が20%代であるが、加齢と共に割合が低くなり、60歳以上では0に近くなる。

〔最終学歴〕

仏壇と神棚の両方を持つと答えた者と最終学歴を関連させてみると、中学・旧制高小グループがもっとも高く、71.4%となり、以下、高校・旧制中学64.7%，大学・旧制高校51.8%が続き、短大・専門学校50.9%はもっとも低い。逆に何も持たないと回答した者は、中学・旧制高小がもっとも低く、6.0%，高校・旧制中学は11.9%，短大・専門学校は17.0%であるが、大学・旧制高校は19.3%と割合がもっとも高い。

〔住宅の種類〕

仏壇と神棚の両方を持つと回答した者は、持ち家(71.6%)と民間借家(76.1%)で高く、公団住宅(13.2%)でもっとも低い。何も持たないと答えた者は、公団住宅(58.8%)，民間アパート・マンション(37.0%)，社宅・公務員住宅(31.3%)が高く、持ち家(5.2%)と民間借家(3.5%)は低い。

〔年間収入〕

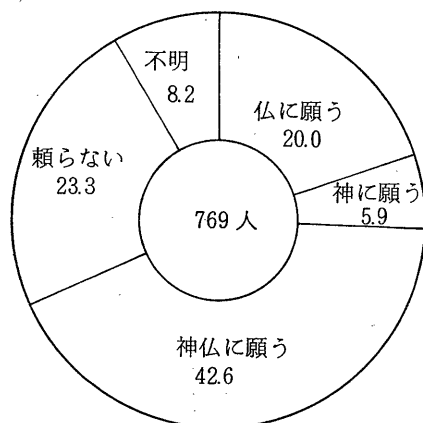
明白な有意差は認められないが、強いていえば、仏壇・神棚共に持つと回答した者は、収入が高くなると割合も高く、何も持たないと答えた者は、収入が高くなると割合が低くなり、年収800万円以上のグループは特に低い。

2. 神と仏に対する願い事（図Ⅵ-2-イ）

日本の宗教が持っているといわれる現世利益について問うた質問である。困っている時に、神や仏の両方に願い事をする者が、328人で全体の42.6%になり、仏に願い事をする、154人(20%)がそれに続く。つまり、仏と神の両方と仏だけに願い事をするを合わせると482人、

62.6%に達する。仏よりも神に願い事をする数字は小さく、単独では、45名(5.9%)、神仏に願うと合算しても373名(48.5%)である。神仏に頼らない者の数字は、179名(23.3%)に達する。

図Ⅵ-2-イ 神仏への願い事



| 合 計 | 769 人 |
|-------|---------------|
| 仏に願う | 154 (20.0 %) |
| 神に願う | 45 (5.9 %) |
| 神仏に願う | 328 (42.6 %) |
| 頼らない | 179 (23.3 %) |
| 不 明 | 63 (8.2 %) |

〔性 別〕

困った時、仏に願うと答えた者は、男(16.1%)、女(23.5%)に分れる。困った時、仏と神に願うと答えた者も、男(35.9%)、女(49.5%)に分れる。反対に、願わないと答えた者は、男(32.7%)、女(14.2%)と男女に差がある。

〔年齢階級〕

困った時、仏に願い事をする者と答えた者の割合は、加齢と共に少しずつ高くなる。すなわち、20～29歳では、9.4%であるのに、40～49歳では、18.6%になり、80歳以上では、29.6%である。その他の困った時神に願う、神と仏に願う、願わないと答えた者と年齢グループの間には特別の相関があるように思われない。

〔最終学歴〕

困った時、仏に願い事をする者と回答した者は中学・旧制高小卒の割合がもっとも高く(24.2%)、大学・旧制高校卒がもっとも低い(9.6%)、高校・旧制中学(21.0%)、短大・専門学校(17.0%)がその中間にある。困った時、神や仏に願

い事をする者と答えた者は、短大・専門学校卒の割合がもっとも高く、何も願い事はしないと答えた者も、短大・専門学校の割合がもっとも低い。これは、短大・専門学校卒ループに、女性の含まれている割合が大きい事と関係があるかもしれない。

〔職 業〕

仏や神に願い事をしないと答えた者の比率の低いカテゴリーは、サービス職(5.4%)であり、反対に高いカテゴリーは、管理職(39.5%)、専門職(36.6%)、学生(35.3%)である。

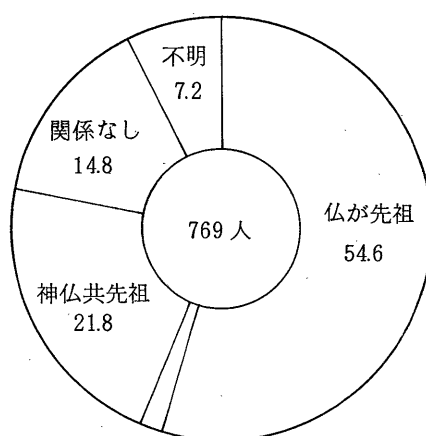
〔年間収入〕

仏に願い事をする者と答えた者の割合は、比較的年間収入の低い層で高く、年間収入の高い層で低い。年収500万円が境界線となっている。神や仏に願い事をしない者の割合も、年間収入の低い層で小さく、収入の高い層で多少大きくなる。

3. 神仏と先祖 (図Ⅵ-2-ロ)

これは、神仏と先祖の関係をみるための質問であるが、仏が先祖であると考えた者は、420名、54.6%であり、神も仏も先祖であるとする者が、これに続き、168人、21.8%を占める。神

図Ⅵ-2-ロ 神仏と先祖



| 合 計 | 769 人 |
|-------|---------------|
| 仏が先祖 | 420 (54.6 %) |
| 神が先祖 | 12 (1.6 %) |
| 神仏共先祖 | 168 (21.8 %) |
| 関係なし | 114 (14.8 %) |
| 不 明 | 55 (7.2 %) |

のみが先祖であると考える者は、12名、1.6%にすぎない。全体のうち、588人、76.4%が仏だけおよび神仏共に先祖であると考え、神だけおよび神仏共に先祖であると考える者、432人、56.2%を越える。神も仏も両方共先祖とは関係ないと考える者が114人、14.8%いる。以上から、現世利益、祖先崇拝に対して、人々が神よりも仏との関係を多少強く持っているといえよう。

〔性別〕

仏が先祖である者の割合は、男(49.9%)と女(59.3%)で異なっている。神が先祖であると考える者の割合や、仏神共に先祖であると考える者の割合は、男女差がない。しかし、両方とも先祖であると考える者の割合は、男が19.3%、女が10.6%を占め、男の割合が高い。

〔年齢階級〕

仏が先祖と答えた者の割合は、加齢と共に大きくなる(20歳代、42.4%、70歳代、61.4%)が、80歳以上は例外であり、年齢群の中では割合がもっとも小さく、37.0%である。逆に、両方共、先祖と関係がないとする者の割合は、加齢と共に小さくなるが、80歳以上になると、25.9%を示し、20歳代と共にもっとも大きい。神が先祖であると考える者の割合や、仏・神共に先祖であると考える者の割合には、年齢群との間に特別の関係はない。

〔最終学歴〕

仏が先祖であると考える者の割合は、中学・旧制高小卒がもっとも高く(58.1%)、以下、高校・旧制中学の57.4%、短大・専門学校の50.9%と続き、大学・旧制高校の47.4%がもっとも小さい。仏・神共に先祖であると考える者の割合も同様、中学・旧制高小が24.6%でもっとも高く、高校・旧制中学、23.4%、短大・専門学校の20.8%がつづき、大学・旧制高校の12.3%がもっとも小さい。他方、これとは反対に、両方共先祖と関係ないと考える者の割合は、中学・旧制高小の10.1%がもっとも小さく、ついで高校・旧制中学の12.5%、短大・専門学校の18.9%が続き、大学・旧制高校の30.1%はもっとも大きい。神が先祖であると考える者の割合は、最終学歴群の間に差はあまりない。

〔同居家族構成〕

両方共先祖と関係ないと考える者の割合は、単身者がもっとも高く(20.9%)、親子夫婦と未婚子(12.6%)がもっとも低い。その間に夫婦のみ(15.6%)と夫婦と未婚子(17.8%)が含まれる。仏・神共に先祖であると考える者の割合は、上とは反対に、単身者がもっとも小さく(13.4%)、婦子夫婦と未婚子(22.3%)がもっとも大きい。二者の間に夫婦のみ(21.3%)と夫婦と未婚子(21.9%)がある。

〔職業分類〕

仏が先祖であると考える割合のもっとも大きい職業は、主婦(64.5%)であり、仏・神共に先祖であると考える割合のもっとも大きい職業は、サービス職(32.4%)であり、両方共先祖と関係ないと考える割合の大きい職業群は、専門職(39.0%)、学生(35.3%)である。反対に、仏が先祖であると考える割合のもっとも小さい職業は、専門職(31.7%)であり、仏・神共に先祖であると考える割合のもっとも小さい職業は、学生(0%)であり、両方共先祖と関係ないと考える割合のもっとも小さい職業は、主婦(5.3%)である。その他居住年数が長くなると、神・仏共先祖と関係ないと考える者の割合は、概ね小さくなる。

4. 彼岸の参詣 (図Ⅶ-3)

彼岸の参詣についての問いであるが、春秋共に参詣する者は、459人、59.7%に達し、春か秋のいずれかに参る者、116人、15.1%を加えると、575人、74.8%が、毎年、彼岸会に参詣することになる。全く参詣しない者も、168人いて、全体の21.8%に達する。

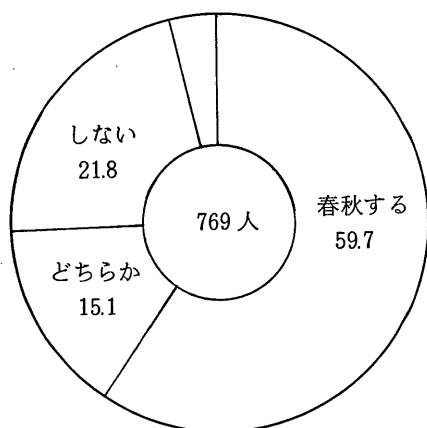
〔性別〕

春秋共彼岸の法要に参加する者は、男(54.4%)よりも、女(64.9%)の割合が大きい。春か秋に限定した場合には、男女ともほぼ同じ割合で差がなく、逆に全くしないという回答は、男(26.6%)が女(17.3%)を上回っている。

〔年齢階級〕

春秋共参詣する人々の割合は、20歳代、27.1%から、平均59.7%を経て、70歳代、78.2%へ

図Ⅵ-3 彼岸のお参り



| 合 計 | 769 人 |
|------|---------------|
| 春秋する | 459 (59.7 %) |
| どちらか | 116 (15.1 %) |
| し ない | 168 (21.8 %) |
| 不 明 | 26 (3.4 %) |

と加齢と共に高くなる。これとは逆に、春か秋のいずれかと答えた者の割合は、加齢と共に、21.2% (20代) から平均 15.1% を経て、11.1% (80歳以上) へと少しずつ低下する。同じく全くしない者の割合も、45.9% (20歳代) から、21.8% (平均) を経て、7.9% (70歳代) へと著しく減少する。ただ80歳代では、身体の不自由な人も増えるためか、全くしないという割合が60～79歳よりも大きい。

〔最終学歴〕

春秋共参詣する者の割合は、学歴間によって差がみられる。中学・旧制高小がもっとも大きく、68.1%を示す。次に高校・旧制中学が続き、61.1%である。さらに短大・専門学校は、50.6%である。大学・旧制高校は45.6%で割合はもっとも小さい。他方、全くしない割合は、中学・旧制高小が14.1%で、もっとも小さく、以下、高校・旧制中学の21.0%、短大・専門学校の34.0%と続き、大学・旧制高校の37.7%がもっとも大きい。春か秋かにする割合は、最終学歴間に大きな差はない。

〔同居家族構成〕

春秋共に参詣する割合は、親子夫婦と未婚子があっとも大きく、単身がもっとも小さい。全くしない割合は、単身がもっとも大であり、夫婦のみ、親子夫婦と未婚子がもっとも小である。

〔住宅の種類〕

春秋共参詣するのは、持ち家(64.7%)や民間借家(60.6%)の住人であり、民間アパートやマンション(22.2%)の住人はもっとも少ない。春か秋にする割合は、社宅・公務員住宅が高く(25.0%)、民間アパート・マンションは低い。当然、全くしない割合は、民間アパート・マンション(51.9%)がもっとも高く、持ち家(17.5%)や民間借家(19.0%)が低い。

〔居住年数〕

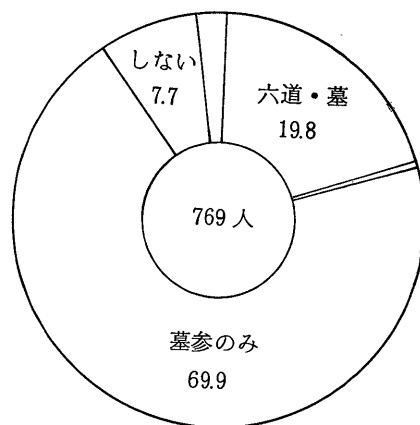
春秋共に参詣する割合は、比較的居住年数の長い者が高く、短い者は低い。反対に、全くしない割合は、居住年数の短い者が高く、長い者は低い。

〔職 業〕

春秋共に参詣する割合は、主婦がもっとも高く(69.7%)、学生がもっとも低い(11.8%)。全くしない割合は、運輸・生産工程(14.6%)や主婦(17.1%)がもっとも低く、学生(52.9%)や事務職(45.1%)が高い。四つのカテゴリー共に、年間収入群間の差は認められるものの、額の高低による差が明白というでもない。

5. 六道参り・墓参 (図Ⅵ-4-イ)

図Ⅵ-4-イ 六道参り・墓参



| 合 計 | 769 人 |
|------|---------------|
| 六道・墓 | 152 (19.8 %) |
| 六道のみ | 3 (0.4 %) |
| 墓参のみ | 538 (69.9 %) |
| し ない | 59 (7.7 %) |
| 不 明 | 17 (2.2 %) |

盆行事についての問いであるが、全国の各地域において、それぞれ特徴のある行事が行なわれている。この問いも、京都における盆行事についての質問である。六道参りは、盆の墓参りと関連する、京都で古くから続いた盆行事の一つである。盆における墓参りは、538人、70.0%に達する。六道参りと墓参りをする者、152名、19.8%と六道参りだけをする者、3名、0.4%を合わせると、155名、20.2%となり、2割を越す者が今でも六道参りを行なっていることとなる。お盆に、墓参りも六道参りもしないと答えた者は、59人、7.7%にすぎない。

〔性別〕

両方参ると回答した者の割合は、男(17.9%)より女(21.6%)が大きい。墓参りだけをする者と答えた者の割合は男(71.2%)が女(68.8%)よりも大きい。

〔年齢階級〕

両方すると答えた者の割合は、加齢と共に大きくなるが、とりわけ80歳以上(33.3%)と50歳代(26.1%)が大きい。墓参りだけをする者と答えた者の割合は、80歳以上の48.1%を別にすれば、すべての年齢群が70%前後である。しかし、40歳を境にして上下に分れる。何もしないと答えた者の割合は、加齢と共に小さくなるが、80歳代では30歳代と同じく、14.8%を示す。

〔最終学歴〕

両方する割合は、中学・旧制高小(24.2%)、高校・旧制中学(20.1%)、短大・専門学校(7.5%)、大学・旧制高校(3.2%)の順に低くなる。墓参りだけするは、中学・旧制高小(67.7%)、高校・旧制中(72.0%)、大学・旧制高校(72.8%)、短大・専門学校(79.2%)の順に高くなる。何もしないは、墓参りだけとは反対に、中学・旧制高小(6.0%)、高校・旧制中学(6.7%)、短大・専門学校(9.4%)、大学・旧制高校(13.2%)の順に高くなる。

〔同居家族構成〕

墓参りの割合は、単身(58.2%)、夫婦のみ(70.5%)、夫婦と未婚子(72.1%)、親子夫婦と未婚子(75.7%)と、家族構成が複雑になるにしたがって高くなる。何もしないは、単身(14.9%)がもっとも高く、親子夫婦と未婚子(3.9%)が

もっとも低い。両者の間に、核家族(夫婦のみ5.7%、夫婦と未婚子9.3%)がある。両方する割合は、もっとも単純な家族(22.4%)ともっとも複雑な家族(20.4%)が高く、核家族(夫婦のみ18.9%、夫婦と未婚子16.7%)は低い。

〔住宅の種類〕

両方する割合は、持ち家(21.6%)と民間借家(23.2%)が高く、民間アパート・マンション(3.7%)と社宅・公務員住宅(6.3%)が低い。公団住宅(16.2%)と借間・下宿(17.6%)が、両者の中間にある。墓参りの割合は、社宅・公務員住宅(87.5%)と民間アパート・マンション(74.1%)が高く、公団住宅(60.3%)と借間・下宿(52.9%)が低い。持ち家(69.7%)と民間借家(70.4%)は平均の値を示している。何もしない割合は、公団住宅(20.6%)、借間・下宿(17.6%)、民間アパート・マンション(14.8%)が高く、民間借家(5.6%)、持ち家(5.8%)、社宅・公務員住宅(6.3%)が低い。

〔居住年数〕

両方する割合は、居住年数が増加するにつれて高くなる。たとえば3年以下の者では、1人もないのに、30年以上では、24.3%を占める。墓参りは、全国的な宗教行事でもあるので、その割合と居住年数との関係を見出すことはできない。何もしない割合は、両方する程、居住年数との関係は明白でないが、居住が長くなると低くなる傾向がみられる。

〔職業〕

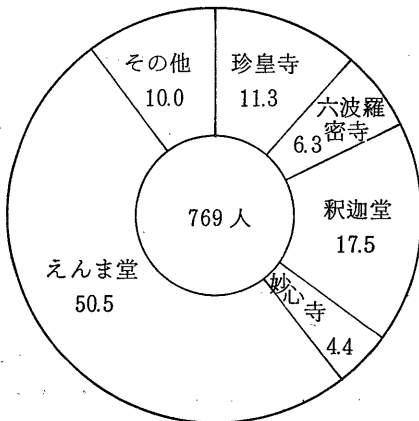
両方する割合は、販売職(28.1%)、運輸・生産工程(22.7%)、サービス職(21.6%)が高く、専門職(9.8%)がもっとも低い。その他はいずれも平均(19.8%)を下回っている。墓参りの割合は、専門職(82.9%)がもっとも高く、管理職(76.3%)、主婦(75.0%)がそれに続き、学生(58.8%)と事務職(60.8%)がもっとも低い。無職(70.3%)や運輸・生産工程(70.3%)が平均70.0%に近い。何もしない割合は、事務職(21.6%)、学生(17.6%)、技術・技能職(14.3%)、サービス職(13.5%)が高く、管理職(2.6%)や販売職(3.5%)が低く、その他は、平均(7.7%)に近い。

〔年間収入〕

両方する割合は、なぜか100万円未満(29.3%)と1,500万円以上(29.4%)が特別高い。高所得者は両方する割合が多少高く、何もしない割合が多少低い。墓参の割合は、所得のもっとも低い100万円未満(61.0%)と、もっとも高い1,500万円以上(64.7%)がもっとも低く、かなり低額の100万～300万円層(80%弱)とかなり高額の1,000万～1,500万円(80.6%)がもっとも高く、いわゆる中間層は平均に近い。

6. 六道参りの対象 (図Ⅵ-4-ロ)

図Ⅵ-4-ロ 六道参りの対象



| 合 計 | 160 人 |
|-----------|--------------|
| 珍 皇 寺 | 18 (11.3 %) |
| 六 波 羅 密 寺 | 10 (6.3 %) |
| 釈 迦 堂 | 28 (17.5 %) |
| 妙 心 寺 | 7 (4.4 %) |
| えんま堂 | 81 (50.5 %) |
| そ の 他 | 16 (10.0 %) |

京都の六道参りの対象地についての質問である。普段は、天台寺院の六波羅密寺が賑わいをみせるが、盆の頃だけは、真言系寺院の珍皇寺に人々が集まる。今回の調査地、西陣では、六道参りの対象地として、どの寺院を選んでいるのであろうか。千本通り、連台野に近い、えんま堂と釈迦堂という真言寺院の数字が高い。とりわけえんま堂には、全体155人中81人(52.3%)の人々が参詣し、つづいて、釈迦堂には、28人(18.1%)の人々が参詣に出かける。一方、

鳥辺野に隣接する珍皇寺や六波羅密寺には、それぞれ、18人(11.6%),10人(6.5%)の人々が参詣する。京洛、北西部の千本えんま堂と南東部に位置する珍皇寺は、古くから類似した役割を果たしてきたが、現代においてもなおある程度の類似機能を有しているといえることができる。さらに付言すれば、鳥辺山を越えた花山のあたりと連台野の北西あたりには、京都市営の葬祭場が設けられ、数年前まで京都市が厳格に地面割を行ない、死者は二つの葬祭場のいずれかに運ばれた。

〔性 別〕

男は東山の珍皇寺と千本釈迦堂で女より割合が高く(13.2%対10.3%,23.5%対11.5%),女は六波羅密寺と千本えんま堂で男より割合が高い(8.0%対4.4%,52.9%対47.1%)。

〔年齢階級〕

年齢群についての意味づけは比較的難しいが、珍皇寺についていえば、50歳以上になると出かける割合が高い。また、80歳以上は、珍皇寺とえんま堂の2ヶ寺に集中している。

〔最終学歴〕

東山の珍皇寺では、短大・専門学校卒の割合が高く(20.0%),千本えんま堂では、中学・旧制高校の割合が高い(60.0%)。大学・旧制高小卒は、千本釈迦堂へ行く傾向がみられる(22.6%)。

〔同居家族構成〕

東山の珍皇寺と六波羅密寺には、単身者や夫婦のみの家族がよく参詣し、千本えんま堂には、夫婦と未婚子、親子夫婦と未婚子がよく参詣する。夫婦のみ、夫婦と未婚子の家族は、対象地ほぼすべてに数字が見られるのに対し、親子夫婦と未婚子は、六原地区には出かけることがない。

〔住宅の種類〕

持ち家の住民は、千本えんま堂に集中し、民間借家は、千本えんま堂、千本釈迦堂、東山珍皇寺の3ヶ寺に集中するのに対して、公団住宅は、6つの対象地すべてに分散している。

〔居住年数〕

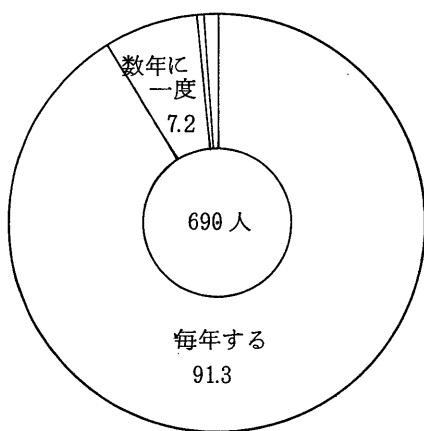
東山の珍皇寺には、居住年数の長い人々がでかけている。30年以上に注目すると、このゲル

ープは、千本えんま堂(54.7%)と東山の珍皇寺(13.2%)でそれぞれ平均を上回っているが、その他六波羅密寺、千本釈迦堂、妙心寺においてそれぞれ平均より下にある。30年以上のグループは、千本えんま堂と東山珍皇寺に出かけていることがわかる。

7. お盆の墓参りの頻度 (図Ⅵ-4-ハ)

墓参りをする者、690名の中、91.3%にあたる630名が、毎年行なうと答えている。何年かに一度と答えた者は、50名、全体の7.2%にすぎない。盆における墓参りについての質問であるから、盆以外の墓参りを含めると、墓参りは人々のもつ身近な行為の一つと考えることができる。

図Ⅵ-4-ハ お盆の墓参の頻度



| | |
|-------|---------------|
| 合 計 | 690 人 |
| 毎年する | 630 (91.3 %) |
| 数年に一度 | 50 (7.2 %) |
| し ない | 4 (0.6 %) |
| 不 明 | 6 (0.9 %) |

〔性 別〕

毎年墓参を行なうは、女(91.7%)が男(89.9%)よりわずかながら高く、何年かに一度は、男(8.3%)が、女(6.3%)より高い。しかし、墓参に関しては、性差はほとんどないといえる。

〔年齢階級〕

墓参の割合は、加齢と共に上昇するが、60歳以上になると、わずかながら低下する傾向にある。したがって、50歳代の数字がもっとも高い。80歳以上になると、身体の好不調が、若い頃より表われてくるため、毎年行くことができなく

なる人もいる。したがって、80歳以上は、30歳代とほぼ同じ数字が出ている。何年かに一度するは、毎年するとは逆に加齢と共に数字が低くなるが、80歳以上は20歳代と全く同じ数字を示している。

〔最終学歴〕

毎年墓参の割合は、中学・旧制高小卒がもっとも高く93.9%であり、高校・旧制中学、91.4%、短大・専門学校、91.3%と続く。大学・旧制高校は84.7%でもっとも低い。何年かに一度はするは、大学・旧制高校がもっとも高く12.2%以下、逆に短大・専門学校、8.7%、高校・旧制中学、6.3%、中学・旧制高小、5.3%と低くなる。

〔同居家族構成〕

毎年する割合は、単身(75.9%)がもっとも低く、夫婦のみ(90.8%)、夫婦と未婚子(91.6%)、親子夫婦と未婚子(91.9%)と高くなる。何年かに一度するは、単身(20.4%)がもっとも高く、以下、夫婦のみ(7.3%)、夫婦と未婚子(7.1%)、親子夫婦と未婚子(6.1%)と低くなる。

〔住宅の種類〕

毎年の墓参は、持ち家(94.1%)や社宅・公務員住宅(93.3%)が高く、民間アパート・マンション(61.9%)はもっとも低い。公団住宅(80.8%)や借間・下宿(83.3%)も平均(90.9%)より下にある。何年かに一度するの割合は、民間アパート・マンション(38.1%)や借間・下宿(16.7%)が著しく高い。

〔居住年数〕

毎年墓参を行なう割合は、居住年数が増えるにしたがって高くなる。3年以下では、81.6%であるが、30年以上になると、93.4%にまで上昇する。何年かに一度は墓参を行なう割合は、居住年数の短いほど高い。すなわち、3年以下では、18.4%であるが、30年以上の居住者では、5.3%である。

〔職 業〕

毎年する場合、技術・技能職(95.7%)、管理職(94.4%)、運輸・生産工程(92.4%)、主婦(91.3%)の割合が高い。何年かに一度の場合、学生(30.8%)、サービス職(12.9%)、事務職

(12.5%)の割合が高い。

〔年間収入〕

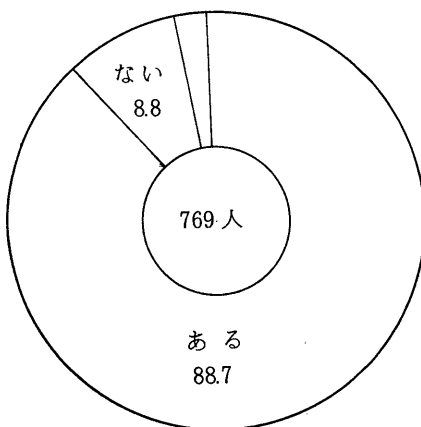
毎年墓参する割合は、概略すれば、年間収入が上がるにつれて高くなるということができるが、600～800万円と1,500万円以上のグループが例外である。したがって、100万円未満群が13.5%、100～200万円群が12.9%であるのは当然としても、600～800万円群の10.9%は、家族構成や年齢がかかわっているのだろうか。また、1,500万円以上の層では、ほとんどしないという数字が3.1%と低い。

8. 地藏盆への参加（図Ⅵ-5-イ）

イ. 地藏盆に参加したことがあるかないか。
この問に対して、あると回答した者は、682人、(88.7%)である。したがって、参加したことがないという回答は、68人、(8.8%)にすぎない。地藏盆は京都を中心として、福井県、滋賀県、大阪府などで、毎年、8月23、4日を中心として行なわれる、夏休み終り頃の行事である。京都では、町内毎あるいは町内をいくつかに分け、地藏菩薩に関連のある子供を中心とする盆行事である。京都に長く住む者は子供の時から、地藏盆に参加し、成人してからは、世話役として地藏盆にかかわるため、行事への参加経験者が9割近くもあり高い。

〔性別〕

図Ⅵ-5-イ 地藏盆への参加



| | |
|-----|---------------|
| 合 計 | 769 人 |
| あ る | 682 (88.7 %) |
| な い | 68 (8.8 %) |
| 不 明 | 19 (2.5 %) |

参加したことがある割合は、女(90.5%)、が男(87.9%)より高い。したがって、ない割合は、男(10.0%)が女(7.5%)より高い。若干、男女差はあるものの、割合はいずれも高い。

〔年齢階級〕

参加したことがある割合は、40歳以上になると高くなる。特に、40歳代が高いのは、子供の頃、食糧事情の悪い時期の地藏盆についての印象が強いことや、現在、地藏盆の世話役適齢期にあたっていることなどが考えられる。

〔最終学歴〕

参加経験率は、四つのカテゴリーの中では、高校・旧制中学卒群が特別高い(93.0%)。しかし、墓参行動や今宮祭との関係に関する割合が、学歴の長さとは比例していたのに対して、ここでは中学・旧制・高小(88.3%)、短大・専門学校(88.7%)、大学・旧制高校(87.7%)の3者はほぼ同じで差がない。

〔同居家族構成〕

参加経験者の割合は、夫婦と未婚子(93.7%)や親子夫婦と未婚子(93.2%)が高く、夫婦のみ(87.7%)や単身(59.7%)が低い。「低い」家族構成と「高い」家族構成の相違は、子供の有無と関連している。すなわち、未婚子の中には、幼児、学童・生徒が含まれ、このような子供をもつ大人は、地藏盆とのかかわりも強くなるはずである。

〔住宅の種類〕

住宅の種類によって、参加経験の割合に大きな差異がみられる。たとえば、持ち家は93.7%、民間借家は91.5%を示して高い割合であるのに対し、民間アパート・マンションは、わずか37.0%にすぎない。借間・下宿(58.8%)も低い。公団住宅(87.5%)も高いとはいえない。地藏盆は地縁を背景とする行事だけに、住宅の種類によって、そのかかわり方が異なるのであろうか。

〔居住年数〕

参加経験者の割合は、居住年数が長くなるにつれて高くなる。たとえば、3年以下では、66.7%であるが、10～14年では86.4%に上昇し、30年以上では、91.7%に達する。こうした事実は、地藏盆が地縁と結びついた行事である

ことと関連していると考えられる。

〔職 業〕

地蔵盆参加経験割合は、職業によってかなり異っている。高い割合の職業は、管理職(76名)の94.7%、販売職(114名)の93.0%、運輸・生産工程(185名)の93.0%、主婦(70名)の90.8%、無職(74名)の90.5%、事務職(51名)の90.2%などである。また、低い割合の職業は、学生(17名)の52.9%、技術・技能職(28名)の78.6%、サービス職(37名)の86.5%、専門職(41名)の87.8%などである。さらに、高い割合の職業は、実数が多く、低い割合の職業は、実数も少ない。たとえば、高い割合の職業中、もっとも実数値の低いものは、事務職の51名であるのに対して、低い割合の職業の中では、専門職の41名がもっとも多く、したがって、事務職51名に及ばない。主婦や無職を除外したとしても、高い割合の職業の中には、もともと地縁を有する職業が多く、それ故実数も大きく、したがって、地縁的な行事への参加経験も多くなるということがいえる。

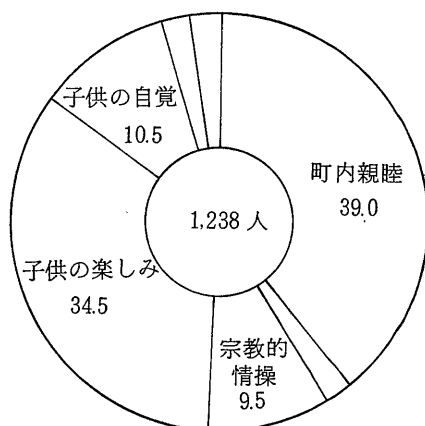
〔年間収入〕

地蔵盆参加経験の割合は、年間収入とかなり強く関連しており、年間収入が多くなるにつれて高くなる。年間収入100万円以下の参加経験は75.6%であるが、400～500万円では、89.1%、1,500万円以上になると、97.1%になる。この割合は、六道参り、墓参などと比較的類似した数字の表われ方をしていいる。

9. 地蔵盆の意義 (図Ⅵ-5-ロ)

町内の親睦をはかるといのが最も多く、483人(39.0%)を占め、次に子供たちに楽しみを与えるが427人(34.5%)と続き、以下、子供に町内の一員としての自覚を育てるが、130人(10.5%)、子供の宗教的情操を養う、118人(9.5%)の順となる。町内の親睦とか子供に楽しみを与えるといった娯楽や、レクリエーションとしての意義を地蔵盆に見出す者が多く、これに対して、子供の躰に役立つ、宗教的情操を養う、子供の自覚を促すなど宗教的教育的意義を認める回答は少ない。また意義はないとする者も、27名(2.2%)と極めて少数である。

図Ⅵ-5-ロ 地蔵盆の意義



| 合 計 | 1,238 人 |
|--------|---------------|
| 町内親睦 | 483 (39.0 %) |
| 子供の躰 | 25 (2.0 %) |
| 宗教的情操 | 118 (9.5 %) |
| 子供の楽しみ | 427 (34.5 %) |
| 子供の自覚 | 130 (10.5 %) |
| 意義はない | 27 (2.2 %) |
| 不 明 | 28 (2.3 %) |

〔性 別〕

地蔵盆の意義として挙げられた項目間に男女差が認められる。たとえば、町内の親睦をはかる(男65.4%対女60.3%)、子供の躰に役立つ(3.4%対3.1%)、子供に町内の人間としての自覚を促す(19.0%対14.9%)のように、集団・社会レベルに関する項目は、女より男の割合が高い。これに対して、子供の宗教的情操(女16.2%対男14.2%)、子供に楽しみを与える(60.6%対50.9%)のような個人の情緒性に関する項目は、男より女の割合が高い。意義はないという割合は、わずかながら女より男が高い(3.7%対3.4%)。

〔年齢階級〕

町内の親睦をはかるとい割合は、年齢が高くなるにつれて高くなるが、80歳以上はその割合がもっとも低い。80歳以上は、子供の宗教的情操(25.7%)や子供の躰(7.4%)の割合が、他よりかなり高く、町内の親睦(44.4%)や子供の自覚(3.7%)の割合が他と比べてかなり低い。子供の宗教的情操の割合は、加齢と共に高くなる傾向にある。これとは反対に、子供に一員とし

ての自覚を促がすという割合は、加齢と共に多少低くなる傾向がみられる。

〔最終学歴〕

大学・旧制高校の割合が、他の学歴群に比してもっとも高くなるのは、子供の躰に役立つ(4.4%)、子供の宗教的情操(17.5%)、子供の自覚(21.1%)であるが、逆にもっとも低くなるのは、子供に楽しみを与える(48.2%)であり、町内の親睦(60.5%)も低い方に属する。一般に人々が高く評価する2項目(町内の親睦、子供の楽しみ)に対して、大学・旧制高校群はあまり評価しない傾向がある。短大・専門学校卒群の割合がもっとも高くなるのは、子供に楽しみを与える(60.4%)であり、反対にもっとも低くなるのは、町内の親睦をはかる(56.6%)である。短大・専門学校卒群は、女性の比率が高いことから、学歴と女性の特徴が混合して数字に表われているようである。高校・旧制中学卒群は、意義を認める割合がもっとも高く、どの項目に対しても、平均して支持を与えているが、子供の楽しみ(57.4%)や自覚(19.1%)の割合が比較的高い。中学・旧制高小卒群は、町内の親睦(67.7%)に意義が集中し、子供の楽しみ(56.9%)が平均に近いことを除くと、他はすべて平均を下回っている。最後につけ加えると、子供の躰に役立つという割合と子供の宗教的情操の割合は、学歴が長くなるにつれて高くなる。

〔同居家族構成〕

地藏盆の意義中、町内の親睦、子供の躰、子供の自覚の割合は、単身、夫婦のみ、夫婦と未婚子、親子夫婦と未婚子の順に高くなる。一方、意義はないという割合は、右と同様の順序で低くなる。親子夫婦と未婚子は、四つの家族構成の中で、地藏盆に意義を見出す割合がもっとも高く、しかも、与えられた五つの意義の中、子供の楽しみを除いて、その割合が最高である。単身は、意義はないという割合が四つの家族構成中最高であり、子供の宗教的情操(17.9%)を除いて、他の四つの意義の割合が最小である。親子夫婦と未婚子において子供の楽しみが、比較的低い割合であるのは、この家族が異質な成員から構成されるが故に、子供に対して

情緒性を与えることが、他とくらべて容易であるからであろう。結論としていえるのは、単純な構成の家族よりも、複雑な構成の家族の方が、地藏盆に意義を認め、各々の意義に対する評価が高いということである。

〔住宅の種類〕

意義はないという割合は、民間アパート・マンション(11.1%)、公団住宅(10.3%)に集中している。町内の親睦をはかるという割合は、公団住宅(47.1%)、借間・下宿(41.2%)、民間アパート・マンション(40.7%)が低く、社宅・公務員住宅(81.3%)がもっとも高く、持ち家(66.0%)、民間借家(67.6%)も高い。子供に楽しみを与えるという割合は、公団住宅(60.3%)、社宅・公務員住宅(62.5%)が高く、民間アパート・マンション(33.3%)が低く、その他は平均(55.7%)に近い。子供たちの宗教的情操の割合は、民間アパート・マンション(18.5%)、社宅・公務員住宅(18.8%)が高く、借間・下宿(5.9%)、公団住宅(10.3%)が低く、他は平均(15.3%)に近い。子供に町内一員の自覚の割合は、社宅・公務員住宅(12.5%)、借間・下宿(11.8%)が低く、他は平均(16.9%)に近い。すべての項目にわたって、平均に近い数字を示すのは、持ち家であり、民間借家もこれに近い。公団住宅、社宅・公務員住宅、借間・下宿は、町内の親睦で平均と大きな差があるものの、子供の楽しみでの差異はそれ程でもない。民間アパート・マンションは、町内の親睦、子供に楽しみ(33.3%)の両方で、平均と大きく異なっている。

〔居住年数〕

五つの意義の内、四項目の割合が、6～9年や15～19年において最高値を示している。残るもう一つの意義「子供の自覚」も居住年数群中6～9年内は第二位である。ここでは、居住年数が増えれば、地藏盆のもついくつかの意義に価値を見出す割合が増えるというのではなく、住みはじめて6年から19年間に当る三群のいずれかに属する住民がいずれかの意義に価値を見出す割合のもっとも高いことを表わしている。とりわけ、居住歴6～14年の人々すべてが地藏盆に何らかの意義を見出している(意義はないという回答は全くない)。

〔職 業〕

町内の親睦の割合は、事務職(78.4%)、運輸・生産工程(70.3%)が高く、学生(41.2%)、技術・技能職(53.6%)、専門職(53.7%)が低く、サービス職(62.2%)が平均(62.8%)に近い。子供に楽しみを与えるという割合は、主婦(72.4%)、事務職(66.7%)、運輸・生産工程(65.4%)が高く、学生(35.3%)、専門職(41.5%)が低く、サービス職(56.8%)が平均(55.7%)に近い。子供に町内の一員としての自覚を与えるという割合は、専門職(26.8%)が突出しているのと、無職(13.5%)がやや低いのを除けば、他は類似している。これに比べて、宗教的情操を養うという割合は、職業によって差がある。この意義の割合は、無職(20.3%)がもっとも高く、もっとも低い事務職は(5.9%)である。無職について販売職(18.4%)が二番目に高い。また技術・技能職(7.1%)、運輸・生産工程(9.7%)が低い方に属する。平均値に近い職業は、管理職の15.8%である。子供の躰に役立つという割合は、ある特定の職業に集中しており、平均(3.3%)より高い職業は、管理職(5.3%)、販売職(5.3%)、技術・技能職(3.6%)の三つのみである。

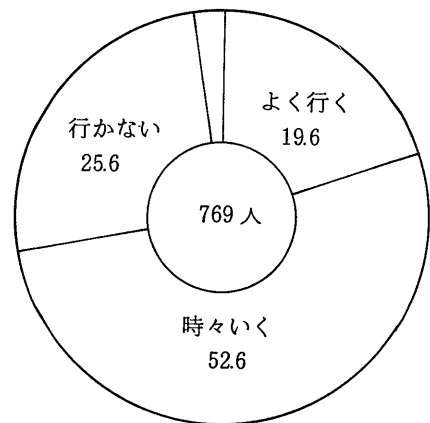
〔年間収入〕

町内の親睦の割合は、100万円未満が41.5%でもっとも低く、200～300万円が80%でもっとも高い。他の収入群の間には、それほど大きな差は認められない。子供の楽しみの割合は、100万円未満、300～400万円、500～500万円の3群が60%を超えるが、もっとも低い100～200万円の41.2%を除けば、他は類似した値である。子供の自覚の割合は、中間にある400～500万円、500～600万円、600～800万円がピークにあり、それより額が高くて低くても割合の低くなる山型カーブを描いている。子供の宗教的情操の割合は、年収のもっとも多い1,500万円以上で低いが、800～1,000万円層では高く、年収の少ない100万円未満、100～200万円層でも高い。中間層は平均(15.3%)よりすべて下にあり、300～400万円(7.3%)はもっとも低い。また、年収100万円未満や1,000万円以上の両極グループは、高低いずれにも極端な割合を示すことが多い。

10. 今宮祭のお旅所へ行く頻度 (図Ⅵ-6)

これに対する回答は、よく行くが、151人(19.6%)、ときどき行くが、404人(52.5%)、行かないが、197人(25.6%)、である。お旅所は、お旅ともいわれ、八坂神社は四条寺町東、北野神社は、上の下立売西大路西にあり、1年に1度、祭りの期間中、もっとも賑わう場所である。西陣学区の住民は、今宮神社の氏子でもあるから、祭りの期間中、大宮北大路下ル付近にあるお旅所へ出かける者が、よく行く、ときどき行くを加えると、72%を越えるのも当然であろう。

図Ⅵ-6 今宮祭のお旅所へ行く頻度



| 合 計 | 769 人 |
|------|----------------|
| よく行く | 151 (19.6 %) |
| 時々行く | 404 (52.6 %) |
| 行かない | 197 (25.6 %) |
| 不 明 | 17 (2.2 %) |

〔性 別〕

今宮祭のお旅所については、女がよく行く(20.1%)、ときどき行く(53.6%)共に、男(19.5%、51.5%)をわずかに上回っている。したがって行かない割合は、男の割合(26.9%)が女の割合(24.5%)を超えている。

〔年齢階級〕

よく行く割合の高いのは、60歳代(25.9%)と70歳代(25.7%)である。80歳代は、相当の高齢者も含まれるから、22.2%と多少下がる。もっとも割合が低いのは20歳代であり、5.9%にすぎない。ときどき行く割合は、50歳代の61.8%を頂点として、年齢が上下に離れる程、割合が下

がる。つまり20歳代(37.6%)と80歳以上(29.6%)が低い。40歳代や50歳代の割合が高いのは、仕事や勤務の関係で、よく行くことはできなくても、ときどきは行くことができるからであろう。行かない割合は、当然のことながら、20歳代(54.1%)と80歳以上(40.7%)が高い。

〔最終学歴〕

よく行く割合は、中学・旧制高小(24.6%)が高く、高校・旧制中学(19.1%)、短大・専門学校(15.1%)、大学・旧制高校(14.0%)と学歴が長くなるにつれて低くなる。また、ときどき行く割合も、大学・旧制高校の47.4%が、他の三つのいずれより低い。行かない割合は、中学・旧制高小(19.8%)がもっとも低く、つづいて高校・旧制中学(26.1%)、短大・専門学校(28.3%)、大学・旧制高校(37.7%)の順に高くなる。

〔同居家族構成〕

よく行く割合は、単身(7.5%)、夫婦のみ(19.7%)、夫婦と未婚子(19.7%)、親子夫婦と未婚子(33.0%)の間で差がある。単純な家族より、異質な成員から成り立つ複雑な家族の割合が高くなっている。夫婦のみと夫婦と未婚子は、よく行くについて、同じ数字を示しているが、ときどき行くになると、夫婦のみ(49.2%)より夫婦と未婚子(54.3%)の割合が高い。行かない割合は、単身がもっとも高く49.3%、夫婦のみが27.9%、それに夫婦と未婚の子24.2%と続き、親子夫婦と未婚子は19.4%でもっとも低い。

〔住宅の種類〕

よく行く割合は、持ち家がもっとも高く、24.0%であるが、他はすべて平均(19.8%)より低い。特に低いのは民間アパート・マンションの7.4%と公団住宅の8.8%である。ときどき行く割合も、持ち家の55.8%や民間借家の59.9%が高く、民間アパート・マンションの33.3%、

公団住宅の27.9%はやはり低い。行かない割合は、公団住宅の61.8%、民間アパート・マンションの55.6%が高く、持ち家の18.2%、民間借家の21.8%は低い。その他はすべて両者の中間にある。

〔居住年数〕

よく行く割合は、30年以上で高いが、居住年数に比例して高くなるというものでもなく、もっとも高いのは6～9年(28.6%)である。ときどき行く割合は、多少居住年数と比例して高くなる場所がみられるが、もっとも高いのは10～14年の59.1%である。行かない割合は、強いていえば、居住年数が長くなるにつれて低くなるといえる。

〔職業〕

よく行く割合は、運輸・生産工程(28.1%)、販売職(23.7%)、無職(21.6%)が高い。一方、学生(5.9%)を別にすれば、サービス職(13.5%)、専門職(14.6%)、技術・技能職(14.3%)が低い。ときどき行く割合は、管理職と主婦がもっとも高く57.9%である。運輸・生産工程が57.3%でこれに続く。一方、学生(29.4%)と事務職37.3%は低い。行くに対する行かない割合は、どのようなになるであろうか。行かない割合のもっとも高いのは学生の64.7%である。以下高い方から、事務職(47.1%)、技術・技能職(42.9%)と続く。一方、行かない割合のもっとも低いのは、運輸・生産工程の14.1%である。以下、低い方から高い方へ、管理職(22.4%)、販売職(22.8%)と続く。

〔年間収入〕

よく行く割合は、年収500万円以上の層が、500万円以下より概して高い。行かない割合は、概ね低所得層において高く、高所得層において低い傾向がみられる。

(加藤信孝)